

るのも、区別点とされている。伊豆半島ではこの特徴は明らかで (Fig. 1-A), 九州でも見た範囲での変異は少ない。四国では、これらが混在し (Fig. 1-B, C), 地域によるまとまりもなく、ときに同一株でも異なる枝があり、この点ではたしかに中間的である。なお、円錐花序の疎密も一様でない。

こうしたことから、四国のものは、標本だけではサクラガンピかシマサクラガンピかのいずれかに同定できるものがあるとしても、現地で見ると断定は容易でないし、それらと別の種と考えるはっきりした根拠も見出せない。ここではいちおう、サクラガンピと題して報告するが、なお今後の研究が必要である。

シマサクラガンピは *Wikstroemia pauciflora* Franch. et Savat. var. *yakusimensis* Makio in Bot. Mag. Tokyo 24: 52 (1910) として記載された。Hatusima (1954) も九州本土ではサクラガンピと区別困難な型も見られるので、サクラガンピの変種とするのがよいとしている。Hamaya (1959) は形態だけでなく地理的に分布が離れていることもあって、種として区別する意見である。

いま、こうして九州南部と東部、四国東部、伊豆と分布することがわかり、しかも四国での変異から考えると、やはりこれらは同一種に含めるのが妥当かもしれない。

最後に、これらの分布と生育環境にふれておく。サクラガンピは、神奈川県箱根と湯河原、静岡県では熱海と沼津以南の伊豆半島に分布する。平地から低山地の乾いた土地でよく見かけるが、海よりも多い傾向もあり、母岩がとくに変わったと

ころではない。シマサクラガンピは、大分、宮崎、鹿児島各県にあり、谷ぞいにも生えるが、低山地で岩石の露出したところでしばしば目につき、やはり特殊な母岩との関係はない。

四国では、徳島県木頭村の高ノ瀬峡から高知県物部村の別府(べふ)峡までと、ほかに物部村別役、根木屋、五王堂の地域に知られている(5万分の1地形図では北川と大栃)。分布の範囲は狭く、母岩とのつながりが注目され、これまでわかっている生育地はすべて石灰岩地帯で、海拔約400mから石立山の1700m近くまで見られる。乾いた岩石地や礫地のイワシデーイワツクバネウツギ群集に生ずるのが普通である。

この機会に、現地調査にいろいろお世話くださった静岡県の大村敏朗、野口英昭の両氏と大分県の眞紫茂彦氏にあつく感謝する。

(高知県■■■■)

#### 引用文献

- Hamaya T. 1955a. A dendrological monograph on the Thymelaeaceae plants of Japan. Bull. Tokyo Univ. Forests 50: 45-96.  
 — 1955b. Some taxonomical notes on Thymelaeaceae from Japan and adjacent regions(2). J. Jpn. Bot. 30: 328-335.  
 — 1959. Dendrological studies of the Japanese and some foreign genera of the Thymelaeaceae — Anatomical and phylogenetic studies —. Bull. Tokyo Univ. Forests 55: 1-80.  
 Hatusima S. 1954. New and noteworthy plants from southern Japan and adjacent district (4). J. Jpn. Bot. 29: 230-238.

#### 新刊

□Brummitt. R.K. and C.E. Powell(ed.): *Authors of plant names* 732pp. 1992. Royal Botanic Gardens, Kew. £24.00.

学名の著者名の省略の仕方は、データベースは無論、さらにはモノグラフやフロラを作る際に頭が痛い問題である。お国柄によることもあり、これまで世界的な基準はなかった。ここでは詳しい歴史は省くが、1980年にキューでは、Draft

Index of Author Abbreviations: Flowering Plants を出版した。菌類、海藻、化石その他でも統一に向けた委員会がもたれ、まとめられたのが本書で、およそ3万名の植物学者名が記録されている。本書に従えば原寛先生は日本で慣用される Hara ではなく H. Hara, Friedrich (Karl) Schmidt は Fr. Schm. ではなく, F. Schmidt, 伊藤洋先生は H. Itô, 伊藤浩司先生は Koji Ito (長音記号なし) となるなど、多少とまどいが無いでもない。もっと

も原先生は、先生宛に送られてきた最初の Draft から H. Hara をあえて訂正しなかったことを覚えている。今後学名の著者名は本書に従うのが適切である。(大場秀章)

□Sivarajan V. V. : **Introduction to the principles of plant taxonomy** Second edition. Edited by N. K. B. Robson. 292pp. 1991. Cambridge University Press, Cambridge. ペーパーバック £15.95 ハードカバー £40.

分類学の基礎を簡素に纏めた教科書である。この一冊があれば分類学の専門用語について、かなりの理解が得られるようよく工夫されている。本書の初版はインドの Calicut 大学の Sivarajan により 1984 年に出版された。この第 2 版もはじめは初版同様にニューデリーの Oxford & IBH から出版されたものである。

本書は、生物分類, taxonomy とその重要性, 目的などを述べた第 1 章はじめにから, エピローグまでの 10 の章からなる。原著者の Sivarajan の好みなのか, 記述はなかなかこってりしていて, 時に理屈が過ぎるきらいを感じた。全体を通覧して, 本書が Davis & Heywood の Principles of Angiosperm Taxonomy (1963) を基調としていると考えられた。一部に「古代インドの植物科学一瞥」のような部分もあるが, 全体を通してこれがインド産の教科書とは思えないほど, インド臭が少ない。それがゆえに汎用の教科書として取り上げられたともいえるが, 評者は熱帯圏に住む研究者らしい視点が著者に欠けていることを残念に思う。

この本では, 狭義の分類学に力点が置かれているが, しかし幅広く分類学全般の重要事項や概念の紹介も忘れてはいない。分子系統学や種生態学などでの共同研究をはじめとして, まますます窓口が広がりまた細分化が進む今日にあっては, これだけ広く分類学全般に通じることはなかなかむずかしい。その意味では一般読者のみならず研究者にとっても本書は座右に置く手ごろな教科書のひとつといえるだろう。(大場秀章)

□鮫島惇一郎: **北の森の植物たち** 300 pp. 1991.

朝日選書 429. 朝日新聞社 ¥1,200 (+送料)。

著者は, 北海道大学, 林業試験場北海道支場に勤務した。長年の研究テーマであるエンレイソウでは, 美しい図を伴う「エンレンソウ属植物」を出版された。

北海道の植物研究では宮部金吾先生の草創期の後を継いだ館脇操先生を抜かしてはその歴史を語れない。その館脇先生も多くのの人にとっては過去の学者となって久しい。ぼう大な論文や雑誌寄稿文を残されたその館脇先生に私淑され, 生涯を北海道の植物と森林研究に送られた著者の姿が思い浮かぶ。

本書は, 館脇先生が北方林業に連載した「汎針広混交林帯」を基礎にした北海道の森林についての解説から始まる。ここには, 先生自身の手になる「北欧雑記」から想像される先生とは別の, 日常の先生の側面が活写されている。

次の「エンレンソウ物語」では著者の研究が手際よくまとめられている。これを読んで, 私ははじめて森林とエンレンソウの研究が著者にとって一体のものであったことが理解できた。

続く第 3, 4 章は北海道に産する樹木や草本について, 著者の体験を混じえた随筆といえる。挿入された線画は生き生きとしている。コバコシャジンの正確な図はこれがはじめてだろう。どの植物をとっても興味深いのが, キタコブシとエゾヤマザクラの関係のように考えさせられることも多い。北海道の植物に興味をもつ方だけでなく, 多くの読者に本書を推奨したい。(大場秀章)

□松沢篤郎・青木雅夫: **渡良瀬川支流山塊の植物シダ植物編** 158pp. 1992. 自費出版. ¥2,000 (送料込み)。

著者のひとり, 松沢さんはかつて東京大学へ内地留学され, 「渡良瀬川支流山塊植物誌」(1965) を出版された。今回, 若い協力者を得て本書をまとめられた。

首都圏に接する渡良瀬川支流山塊は林業を主な産業とする地域だが, 多くの野生植物がまだまだ残っている。基岩が露出しているなど全般に土壌層が浅いところが多い。この土地的条件を反映してかモンゴリナラ類似のナラがみられるなど植